

高梁川流域連盟機関誌「高梁川」
第七十一号（平成二十五年発行）掲載原稿

GREEN DAY 10年の歩みとこれからの課題

—高梁川流域を日本一の流域に—

大久保 憲 作

GREEN DAY 10年の歩みとこれからの課題

—高梁川流域を日本一の流域に—

大久保憲作

私と高梁川

私の家業は材木屋です。祖父が大久保材木屋を創業したのが明治40年ですから、かれこれ106年も木という自然素材を扱っています。日本人とは切っても切れない関係にある、木という素材を商いの糧としていることを、最近は特に誇らしく思っています。お客様が木に触れ、木を撫で、それをいとおしむ姿を見ているとつくづく材木屋で良かった...と思うのです。

我が社の階段の踊り場に、岡本淡雅(南画家)の描いた大きな日本画(1・8m角)がかかっています。先代社長が依頼したものでしょうが、切り立った崖の合間を、絵の中ほどから右下方へ蛇行した高梁川が流れ、川の早瀬には4連の丸太筏が急流を下っている図です。筏師が巧みに竿を操っています。この絵を見るたびに「昔は県北の木材をこのようにして消費地に運搬して来たのだなあ、私の

家業と高梁川もまた深い関係にあったのだ」と思うのです。丸太のまま筏に組まれた杉や檜の原木は下流のどこかで(おそらく酒津あたりだと思いますが)陸に上げられ、大八車に積み替えられて寿町にあった祖父の経営する製材工場に運び込まれたのだろうと想像しています。高梁川は県北材の仕

入れの動脈の一つとして、大変重要なものだったので。

仕入れといえば電話、私が小学校に入学したころの電話は今とは違い、受話器をとり交換手に、先方の電話番号を伝えて繋いでもらう方式だったようです。夕食の後で親父が材木の仕入れや、運搬に関する事を毎日



丸太筏を下る高梁川

のように大声で話していました。「新見の〇〇番類みます」とか「刑部の〇〇番」と呼び出ししていたのです。当時、国産材といえ、高梁川流域の木材を示す事が一般的だったのです。

私個人と高梁川との係わりは、小学校入学の頃(昭和29年)に始まります。1年生になったばかりの夏に旧電橋の橋脚のところで、川泳ぎの行事があったのです。1年生になったばかりの子供を高梁川で泳がすなんて、今では到底考えられない事でした。また酒津の配水池や東西用水の樋門の所での水遊びは楽しい思い出です。今なら配水池は自然のプール、樋門はウォーターライダーと言ったところでしょうか。子供にとって高梁川の清流は夏の格好の遊び場でした。これらが私と高梁川の付き合いの始まりだったのです。

それから半世紀近く時を経て、再び高梁川との係わりが大きく、深くなっていくとは、私自身思いもよらなかった。

GREEN DAY 環境運動の始まり

1996年の12月にエフエムくらしきを開局しました。それに先立ち、くらしき町家トラストの代表理事である中村泰典さんと2人で開局準備室をスタート。中村さんは当時から環境問題に関心が高く、とりわけ水と人の暮らしとの繋がりについて注目していました。ですからいろいろな障害を乗り越えて開局したFMくらしきでは、高梁川や環境関連のプログラム「みずすましの耳」を制作・放送して

する知恵を日本各地の実例をもって語っておられました。

日本文化の根幹が、水を仲立ちにした人と大地との営みの文化であり、森を守ることで土壌が生成され、水源となりやがて川となる。流域では里山と田を形成し米づくりの文化が継承されるという関係を分かりやすく説かれていたのです。それまでは、川は水の流れる所、森は材木を生産するところ、米づくりは農家の仕事とまるで別々のもののように考えていた自分を恥じました。どれもこれも日本文化の根幹を成すものだったのです。

そしてそれらが上手く重なり合ったものが私たちの暮らしであり、地域の生活環境です。その延長線上には地球環境の保全という、グローバルな課題と直結すると分かったのです。

1992年のリオデジャネイロサミットの後、日本各地の環境破壊の問題や地球の温暖化防止に関する議論が国内でも話題となりつつあり、折しも1997年にCOP3京都会議が開催され日本でも大きな関心事となりました。そこで中村泰典さんとも相談し、倉敷市民にとって母なる川、高梁川を主役にした環境キャンペーンを立ち上げようとなったわけです。

2002年の夏の終わりからその為の準備を始めました。当時4月29日は「みどりの日」という祭日でした。「みどりの日」が森や水という環境の事を考えるには最もふさわしい日なので、その日に自然や健康の基本である、森林や水というものと私たちの暮らしとの関連

いたほどです。

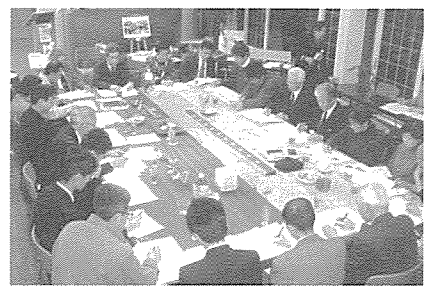
私たちはこの土地で生まれてからずっと高梁川の水で育ってきましたし、ご先祖様もまたそうなのです。長い世代にわたり同じ川の水を飲み、同じ川の水で農作物を育て、お米を作り続けてきました。高梁川には沢山の支流がありますが、私たち自身が一つの支流であるとも言えます。なぜなら人体の約70%は水であり、私たちは高梁川の水で生きているのですから。「同じ釜の飯を食う」という言葉はある種の連帯感を表現したのですが、「同じ川の水を飲む」ということも同意でしょう。県北の源流近くの森に育つ木も、数々の棚田や田んぼで毎年実るお米も、鮎も、とんぼもありとあらゆる生物がこの高梁川の水を生命の源としているのです。

高梁川の流域面積は2、670平方kmと特に大きな川ではありませんが、新見市花見山の源流から始まり、はるか水島灘に至る流路延長111kmの川筋は豊かな自然と多様な歴史や文化、そして歴史上の勝れた人々を生んだ、本当に卓越した風土の流域だと心から思います。川から学び、特質を知れば知るほど、高梁川流域の素晴らしさ、豊かさを実感するようになりました。

2002年頃でしたか、立正大学名誉教授の富山和子先生の「環境問題とは何か」を読む機会がありました。富山先生は、水問題、緑の問題の第一人者であり、山紫水明と言われる日本の自然の美しさを数千年にわたり守ってきた日本民族の豊かな感性、自然と共存

を考える催しを實行しようと思

めました。2003年のみどりの日の催しだからイベント名は「GREEN DAY 2003」とすんなり決定しました。これがGREEN DAYの始まりでした。流域各地の運動家、運動団体による実行委員会では、昭和29年に大原總一郎氏により設立された高梁川流域連盟の趣意書が議論のバイブルでした。



GREEN DAY実行委員会の様子

さて、何をするのか。一口に高梁川流域と言っても大変広いエリアです。流域全体の環境に係わる事、水に係わる事のみならず住まいや食材、観光や遊びなど流域の暮らしと環境全般を捉えたい。その意識を共有するため、基調講演は前述の富山和子先生にお願いしました。

この講演に先立ち、先生には前日の28日に倉敷に入ってもらいました。その日は先生の希望で、高梁川の源流エリアの一つでもある大佐町(当時)からスタートし、高梁川を左右に見ながら倉敷まで下ってくるフィールドワークとなったのです。町を上げて環境教育や自然教育活動が盛んだった大佐町の関係者とも面談し、大佐町に

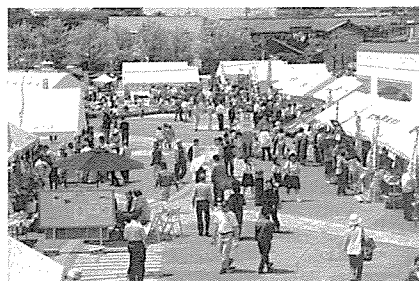


酒津配水池を視察する富山和子先生

ある倉敷水源の森を視察した後、いよいよ高梁川に沿った国道180号線を下り始めました。先生は私の運転する車の窓から高梁川を感慨深そうに見続けておられました。時折、「この前来た時にここは……」などと話して下さいました。総社市の湛井堰では下車しじっくり視察。湛井堰からは国土交通省岡山河川事務所スタッフも説明に参加されました。

先生は全国の河川や森をこのように御自分の足で歩いておられ、その経験に裏付けられたお話だから説得力があるのでしょう。

倉敷芸文館ホールでの基調講演を核として、芸文館広場をメインのアピール会場とした「GREEN DAY 2003」は天候にも恵まれ、静かな催しでしたが流域各地から参加した個人や団体の熱い思いの結集した、当時としては何もかもが異例のイベントでした。北は鳥取県大山のふもとから南は水島まで約40の団体がアピールに



芸文館広場でのGREEN DAY

参加してくれました。彼らはイベントに陣取り、日頃活動している事や自分たちの環境問題に関する思いや主張を静かにそして熱心にアピールしたのです。催しにいかにも多くの人を寄せるといふ目的ではなく、ブースに立ち寄って頂いた方々がアピールに少しでも共感してもらい、そして気付いてもらう、生

意気ですが啓発の為の純粋な催しでした。来場された約10、000人の方々はおそらく何かを感じてくれたと思います。

この一連のイベントは何を目的に行われたのでしょうか。「高梁川流域の森と水と暮らしを考える」がテーマ。高梁川は、流域の2県35市町村（2003年当時）に恵みをもたらしていますが、私たちが自身がこの川の運命共同体だと自覚する事。地球の温暖化やそれを取り巻く様々な環境問題は、もはや他人事ではなく、自分自身の生活の中でも身近な現象だと理解する事。従来は流域各地で各個人、各団体がそれぞれの立場で主張していた事を、「GREEN DAY」という共通のステージに集まり、流域の人々に大いにアピ

ルしていく事。これらが私たちが実行委員会の目的でした。

これからのGREEN DAY

GREEN DAYは倉敷市では芸文館エリアで2003年から2005年に、総社市では2006年と2007年に水辺の楽校エリアで、2008年、2010年には高梁市の中心市街地で開催しました。

高梁川を北上し、年に一つの都市で「GREEN DAY」を各団体が同日に催すという、この8年間に及ぶスタイルは2010年の高梁市で一つの区切りとしました。2011年からは運動の進め方を修正し、流域各地の団体ごとに通年で事業を開催していく形へと変更したのです。

各地にはその土地固有の人や自然を対象とした立派な環境活動が定着しており、一つ一つが地域の自然学校のような形で存在しています。それらをピックアップし、それぞれの地域で誰もが興味を持つことができるスタイルへと変えて行つたのです。これが「GREEN DAY」から「GREEN DAYS COLLEGE」への大転換でした。様々な課題について、最もふさわしい地域で最もタイムリーな時期に誰でもが積極的に学びに参加できる形。家庭教育学校教育に続く今後注目すべき地域教育ともいえるものではないでしょうか。地域に固有のものとは古代ローマ人のいう、「ゲニウス・ロキ」



流域の価値を次世代に伝える

というものでしょうか。その場所に潜む地霊の力、固有の雰囲気、その地の様相、その地の本質、風土といったようなものだと、大原謙一郎さんがお話になっていました。

その地の「ゲニウス・ロキ」を学ぶことによって、意識や価値観が共有され、大切なものが次世代に伝わり易くなつていくきっかけになると考えています。

2011年では、次の年にGREEN DAY運動が10年目の節目を迎える年なのでその下準備としてGREEN DAYS COLLEGEを立ち上げ、地域の学び、地域教育の仕組みを作る事を課題に据えました。高梁川流域では次の世代に伝えるべき様々な事象が数多くそれぞれの地域に集積、蓄積されています。それをGREEN DAYS COLLEGEが収集し地域固有の教養（地域版リベラルアーツとでもいいますか）としてプログラム化し誰もが利用できるようにする。カリキュラム化した地域の様々な事象を学べば学ぶほど、学び手自身が良い方向に編集されていく（より良き地域人材になる）という理想を目指したのです。

高梁川流域風土記をICTで編纂する

グリーンデザインカレッジが次世代に伝えるべきだと考える地域固有のコンテンツは、将来的には地域教育の教材として統合・編集される事が理想です。そうなるべく初めて流域の知恵を誰もが自分の人生に生かす事ができるようにします。

高梁川流域が、住民にとっても地域企業にとっても地域を学ぶ場、人づくりの場と成り得るし、他に先んじた流域という地域価値も高まるのです。

出雲風土記は有名ですが、残念ながら備中風土記は編纂されていないようです。今の時代だからこそ、ICT（情報通信技術）を駆使し、流域の風土をビッグデータとして編集しクラウド化すれば良いと考えます。インターネット上で、流域の風土を大項目ごとに層別した地図を作成、関連画像も添付してマッピングし、個々の項目ごとに奥へ奥へと詳しい解説を深めていく。中小の項目や個別名称などで検索ができれば尚更興味深く便利な風土記マップになるでしょう。

単なる知識習得だけでなく、観光価値も増すでしょうし、チャンスがあれば新しいコミュニティビジネスも起業出来るかもしれません。デジタル版高梁川流域風土記の完成です。一度クラウド化したデータは流域の良識人によって適切に更新されるでしょうし、何よ

共有し、更に高めていくことが出来るかどうか、そこが問われているのだと思います。

趣意書の中段には『そこで高梁川流域の市町村は、互いに協力分担して、高梁川とその流域の文化や産業の歴史と現状を研究して、これを守り伸ばしていくために努力したい。連盟市町村は互いにその個性を生かしつつ、親和協力の精神をもって手をつなぐと同時に、人文科学的に、また自然科学的に各般の研究を分担し、それを総合して高梁川流域連盟の活動の基礎的な資料を創り上げる。』と具体的に述べられ、更に、『こうした高梁川流域連盟が、研究活動と年間の行事を通じて、毎年親睦を重ねて行えば、河川を中心とする文化連合の意義と、我が国における最初のモデルケースとして確立する事が出来るであろう。』

これこそが、高梁川流域風土記を完成させ、先頭を切る、日本一の流域を目指せよ。と言われているのではないのでしょうか。

7市3町の自治体を主たる構成員とする今の高梁川流域連盟が、この度設立60周年を迎える年に当たり、個々の自治体の枠を越えて政策を発想立案できる流域連盟専門担当員を配置するのみならず、意識ある民間人を相当数巻き込んだスペシャルチームを組織し、設立者の崇高な理想を実現するために、今こそ一歩も二歩も踏み込んでいただきたいと願うものです。

(GREEN DAY実行委員会 委員長)

りも誰もが高梁川流域の文化や歴史を学び、その知恵が元になって現実の社会問題の解決アイデアや、未来への希望を描けるようになれば、とても素晴らしいことでしょう。

デジタル版備中風土記が完成した時こそ、この高梁川流域が名実ともに日本一の流域になる日なのです

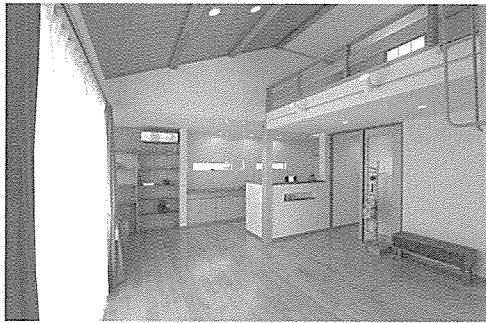
高梁川流域連盟に期待すること

郷土の先駆的経営者であり、地域の指導者でもある、大原総一郎氏の呼びかけで、1954年（昭和29年）3月に高梁川流域連盟が発足しました。その設立趣意書には『高梁川は郷土の文化を生み、産業を育て、歴史の流れと共に人々の生命の糧となり、魂の故郷となった。（中略）高梁川は川によって結ばれた、共同社会全体の運命的な共有物でもある。（中略）高梁川流域の人々はこの川を機縁として互いに理解を深め、相親しみ、協力してこの川を守り、この川で培われた文化や産業の協同体をより美しく、より合理的に築き上げなければならぬと思ふ』とあり、その今日的な意味を考えてみます。

確かに高梁川は源流から瀬戸内海に流れ出る河口まで、多くの自立した自治体（設立当初は八十八の市町村）を貫通しています。現在は、それらの自治体（7市3町）が中心となって組織されているのが高梁川流域連盟ですから、大原さんが言われたように個々の自治体の境界や、それぞれの運営的な都合を越えて流域全体の価値を

ふるさとの木を使った家づくり

「地産地消」とは、地元で採れた生産物を地元で消費する事。住まいに関して言えば、ふるさとの木を使って建てた家に暮らす事も一つです。私たちクラモクは「ふるさとで育った木を使った家づくり」、
「木を通して豊かな暮らし」を提案致します。



お気軽にご相談下さい



倉敷木材株式会社

☎0120-40-1907 倉敷市中島1000-1 www.kuramoku.com